

## B. ラッセル教育思想研究

—政治権力と教育—

金子光男

(1)

バートランド・ラッセル (Bertrand Aurther William Russell) (1872—) は、20世紀における思想界の一大巨星である。彼の学問的業績は、数学・論理学をはじめとして、広く哲学、政治、経済、社会改造、道徳、教育などの重要問題に及び、しかもいまなお90才を越えた高令をもって、著述に講演に実践運動にと、世界平和の悲願に向かって卒先活動をつづけている。ラッセルの社会哲学を研究したリンデマン (E. C. Lindeman) は、『バートランド・ラッセルの哲学』(The Philosophy of Bertrand Russell, 1944)において、ある一人の社会哲学者がいかなる意義を世界歴史の現段階のなかで持っているかということは、「その人が、平和と世界体制の問題に関して、いかなる援助と激励とをわれわれに提供することができるか」<sup>(1)</sup> という基準によって測定することができるかと述べている。それから20年たった今日、核兵器による危険な事態が各地で起っている世界史的現状において、このことばはますますその重要性を露呈してきたのである。そしてこの基準にてらして思想家を評価するとき、理論的分野と実践的分野の両面において、わたくしは、まずラッセルを挙げなければならないのである。

さてラッセルのかかる思想的基盤は、一体何に準拠するのであろうか。それこそ彼の長き生涯を前後に二分した第一次大戦そのものであった。おもうに大戦は専制的政府による政治的、経済的原因によって勃発したものであったが、しかし彼は戦争によって損害を受けるべき当時のイギリス民衆が、逆に熱狂的に戦争を謳歌するという心理的支持は、どこから生起するのであろうかという問題と取り組まざるを得なかったのである。そして彼は戦争の原因として、人間性には調和よりもむしろ戦争愛好の衝動 (an impulse to conflict rather than harmony)<sup>(2)</sup> があり、しかもこれが究極的原因であるという事実を発見した。ラッセルは、この民衆心理のなかに教育の誤謬を把握し、伝統的教育の在り方に疑問の念を抱いたのである。なぜならば、人間性を取扱い、これを改善することは教育の問題だからである。かくして彼は、第一次大戦を契機として、数学・論理学の研究から、政治的・社会的問題の研究、とくに教育問題の研究へと一大転換をとげたのである。

ラッセルが、教育の問題を注目するにいたったもう一つの理由は、当時の教育制度に弊害があり、学校教育に不満を感じたからであった。そもそも教育とは、子供たちをして「生きるに値する生活」(the life good to live)<sup>(3)</sup> が何であるかを探究させ、そしてよりよき社会への展望を持たせることが目的である。彼はありきたりの伝統主義教育 (essential education) が、意志の鍛錬に重点をおいて知性と感情の形成を抹殺し、他方進歩主義教育 (progressive education) が体系的知識の啓培と論理的判断の育成とを欠如していることを認め、現代のような複雑な技術文明の時代にあっては、

表面的な学習ではなく本質的な学習と取り組まなければ、よく生きるに値する生活を繰り展げることはできないであろうと確信した。ラッセルは、『教育論』(On Education, 1926)の序文で、「世間には、著者と同じように、幼い子供をできるだけよく教育しようと思ひながら、しかも現存教育制度の種々の弊害に子供をさらしたくないと考えている親が多数いるに違いない」<sup>(4)</sup>と当時の親たちの悩みを代弁している。しかし世間一般の親たちは、いつのまにか教育的良心を放棄し、現状と妥協してしまう。それは世間の親たちの望むところが、子供を真の人間たらしめるところの「それ自体においてよい教育」(an education which is good in itself)<sup>(5)</sup>ではなくて、他人の子供よりも上級学校へ進出させ、やがては立身出世や栄達をはからせようとするところからである。

しかもかかる傾向に、現代の自由競争の社会的害悪が迫車をかけ、親たちの教育的期待と社会的害悪との矛盾を醸成し、政治権力はこうした状況をたくみに把えるのである。かくして教育はいつの時代にあっても権力の道具として利用されるにいたるのである。ラッセルの教育問題への関心の第二の動機がここに存在したのである。しかもこれらの問題は、いずれも政治的現実と無関係ではない。いや子供への教育的期待が成果をあげるには、われわれ自身の生活態度そのものが、政治の動向と全く無縁であることは許されないのである。かくしてラッセルは、政治的現実と政治的権力とに対決し、人間の自由と人類の平和のために、現代教育への哲学的分析を行うにいたったのである。では彼の教育的発言は、いかなる構造と内容をもっていたのであろうか。

## (2)

ラッセルの教育に関する著書には、前述した『教育論』のほか、『教育と社会統制』(Education and the Social Order, 1932)があり、その他にもまた、『社会再建の原理』(The Principles of Social Reconstruction, 1916)のなかに特に教育に1章がさかれており、『産業文明の将来』(The Prospects of Industrial Civilization, 1923)にも教育に1章がさかれている。また最近出版された『事実と虚構』(Fact and Fiction, 1961)のなかにも第2部が、政治と教育として論ぜられている。これらの著作を一貫して流れている彼の教育思想研究の根本的態度は、個人主義の立場に立って、政治権力が教育へ及ぼす統制から人間の自由を擁護し、さらに自由主義を基調として理想的な人間像を形成し、このことから社会改造、平和建設さらに世界政府の確立などと深く結びついた教育理論へと展開されているのである。

ラッセルをして思想的転換を余儀なくせしめた第一次大戦は、当時の資本主義的列強が、その帝国主義的矛盾を打開するためにひき起した戦争であった。これを契機として教育研究に転進したラッセルが、まず問題としたのは、資本主義が起したこの戦争に国民大衆がいかにして動員され鼓吹されていったかという政治的技術であった。そして彼は、これが独占資本主義下における資本家の教育支配(the domination of education)という事実であることを指摘した。<sup>(6)</sup>すなわち、国家は資本の要求に応じて、国民の文化的水準をあげ、精神的陶冶をはかり、もって普通義務教育制度の確立を促進した。義務教育制度は、けだし近代国家の発展とともに国家の重要政策の一つであり、あらゆる人びとに教育の機会を与えた民主主義教育の基本原則にもとづくものであった。しかし、ラッセルの指摘した点は、その背後にある政治権力と教育制度との結びつきであった。すなわち、彼によれば、国民教育は、資本主義という現存社会制度を尊重し維持するという建前に立って、能率の仕事ができる程度の知識技術を計画的に注入し、政治権力に対して正しい判断力や批判力を持たせないで、国際理解や世界平和を教えることを回避し、国民の団結を固める指導となったというのである。かかる状態にあっては、たしかに政治権力は主体的知性を持たない国民大衆をおのが今

下に動員することができるのである。

ラッセルは『教育と社会統制』のなかでいう、「普通義務教育制度の確立こそ、教育に関するこれまでの常識を完全にくつがえした最大のものである。」<sup>(7)</sup>と。まさに教育の本来的在り方は、政治権力とは独立して、子供たちに正しい判断力や批判力を育成し、社会に適応するだけでなく、社会を改造する使命をもつものである。その教育が現状維持のための手段と化し、「一般に現存するものに味方し、社会改善に反対する最強の勢力」(Education is the strongest force on the side of what exists and against fundamental change)<sup>(8)</sup>となり、さらには、深刻な矛盾を内包する資本主義体制を維持するためにただ狂奔しているに過ぎなくなるのである。このような教育は、子供をそれ自体として尊重しているものとはいえない。真の教育は、子供の人権を尊重するところに生れる。子供の人権を尊重する教育は、現状維持を代弁する成人の考えを子供に注入することではなく、子供が自主的に考えるに必要な知識や習慣を与える教育のことである。しかし現代の国民教育は、子供を社会発展、国家増強のための道具とみなして行われていたのであって、ラッセルはかかる教育を、「政治的武器としての教育」(Education as a political weapon)<sup>(9)</sup>と名づけている。彼はいう、「政治的武器としての教育は、もしわれわれが子供の権利を尊重するならば、存在し得ないはずである。もしわれわれが、子供の権利を尊重するならば、われわれは、子供に、独立の見解を形成するために必要な知識や精神的習慣 (the knowledge and the mental habits required for forming independent opinions) を与えるような教育をすべきである。しかし、政治的制度としての教育は、子供の意見を必然的なものにするような方法で、習慣を形成したり、知識を制限したりする (to form habits and to circumscribe knowledge in such a way as to make one set of opinions inevitable) ように努めるものである」<sup>(10)</sup>と。

そしてかかる資本主義体制を維持するための政治的武器と墮した国民教育は、現存体制を維持するために、資本家や権力者が有利になるために、国民に社会科学的認識をもたせないで、真実を知らせないように努めるのである。それは、もし国民が真実を知れば、かれらは自分たちの利害関係について自主的に判断し、自主的に行動するようになるからである。じつに「権力の所有者たちは奴隷が自分の利害について誤った観念をもつように、その奴隷の眼から真実を隠したがる」<sup>(11)</sup>ものである。そして政治権力は民衆の啓蒙を警戒し、できるだけ盲目になるように操作する。それには子供のうちから権力者がわの都合のよい知識や技術だけを強制的に義務的に詰込む方法がとられるのである。かくして教育本来の民主的原理と、政治的武器としての国民教育との矛盾を妥協させるために、誤れるナショナリズムが強調され、公正ならざる愛国心が鼓吹されるにいたるのである。<sup>(12)</sup> けだし愛国的精神の効果的な普及は、もっぱら国民教育にまたねばならないからである。われわれは、つぎにこのナショナリズムを分析することによって、政治権力と教育の本質の究明を行わんとするものである。

### (3)

さて現代の世界歴史は、過度の国家権力が犯したもろもろの罪悪でつづられているということが出来る。国家権力こそ社会科学最大の課題である。すでに近代にあって、人倫の体系を樹立したヘーゲル (Hegel) は、国家をもって人倫の最高段階であるとし、これに対して限りない尊敬を捧げてきた。しかし現代はかれらのように国家を詠歌することはできない。国家は悲劇の演出者であり、現代人はその被害者である。われわれはこの20世紀の怪物と堂々と対決しなければ、自由も平和も確立することはできない。このいみでラッセルは、政治権力の本質の究明に乗り出したのである。

かつての世界第一次大戦も、そしてまた今次の第二次大戦も、ともに帝国主義的ナショナリズムの所産であり、独占資本による利己的利益のイデオロギー的隠蔽物に外ならなかったのである。資本主義体制にあっては、権力は資本家の掌中にある。この点は、ラスキ (H. J. Laski) が、しばしば「政治権力は、事実上経済力の所有者たちのものである」<sup>(14)</sup>とくり返しているところである。しかも現代にあっては、いかに悪辣な政治権力も、ラッセルのいう「むきだしの権力」(naked power)<sup>(14)</sup>ではなくて、巧妙に大衆を操作し、世論を形成しながら、自己の所有欲を現実化するという手段をとるのである。そして資本主義体制は維持し強化され、その政治権力によって教育が翻弄されるのである。それは教育のなかに帝国主義的ナショナリズムが注入されるからである。したがって教育を本来の姿に戻すには、まずこのナショナリズムを制圧しなければならない。ラッセルは、「ナショナリズムの害悪を防止する唯一の方法は、ただナショナリズムそのものを減殺すること (the diminution of nationalism)」<sup>(15)</sup>であると主張する。もちろんあらゆるナショナリズムを一掃することではなくて、教育を疎外するナショナリズムを廃棄して、いかにして正当なナショナリズムを確立することができるかが問題である。ラッセルはこの点についてどう考えていたのだろうか。

ラッセルは、この点に関して、最近の著作『事実と虚構』(Fact and Fiction)のなかで、ナショナリズムを分けて、文化的ナショナリズム (cultural nationalism) と、政治的・経済的ナショナリズム (politic and economic nationalism) とに区別している。そして前者は賞讃すべき点が多いが、後者はつねに有害であると述べている。<sup>(16)</sup> ナショナリズムとは、一般には、人間が一つの中央政府のもとに結合されて国民と呼ばれる自然的集団を形成するにいたるような伝統的共感をもつ人間性のことである。そしてナショナリズムは、歴史的にみて、どこでも外国の支配か脅威に対する抵抗からはじまっている。したがって本来は民主主義的なものである。しかしドイツ統一による新時代の到来以後は、ナショナリズムは民主主義的なものよりはむしろ軍国主義的なものとなり、国家の独立を主張するとともに、他国に危害を加える権利をもつにいたり、この新しいナショナリズムが今日まで西欧を支配してきた。じつにラッセルのいうように、「勝ちほこったナショナリズムは帝国主義になる (Nationalism triumphant becomes Imperialism)」<sup>(17)</sup>のであり、「帝国主義とは権力の保持者の手中にあるナショナリズムである (Nationalism in the holders of power is called Imperialism)」<sup>(18)</sup>ということとなる。

しかしナショナリズムは、文化的見地から考えた場合は大きな価値がある。文化は、これを生んだ民族や国民の独自の生活形式と思考方法を備えている。そして世界がその政治と経済とを統合するような段階に到達しても、文化だけはその国民性と民族的伝統とを保持しなければならない。すなわち文化を発展させるには、「文化的独立性と政治的統一性とを結合すること」(Combining cultural independence with political union)<sup>(19)</sup>が重要なのである。しかし問題なのは、この文化的ナショナリズムが計画的に政治的ナショナリズムを高揚するための媒介変数とされてきたということである。このように逆効果的な要素となったというところに政治権力の教育への魔術が存在したのである。資本主義体制がナショナリズムを必要としたのは、植民地主義による利潤を計算したからであり、そのためにこそ教育の世界に侵略的な愛国心の鼓吹を持ち込んだのである。ラッセルが、「ナショナリズムは、現代文明をどん底に突き落とす主要勢力である」(Nationalism is the chief force impelling our civilization to its doom)<sup>(20)</sup>と非難し、「ナショナリズムは、人間精神の泉をほしあげてしまう危険な教義である」(Nationalism is another doctrine which dries up the springs of Humanity)<sup>(21)</sup>と告発しているのも、ナショナリズムと政治的・経済的原因との結合に

あるからである。ここにわれわれは、資本主義体制と政治権力とナショナリズムの教育とのむすびつきを認識することができる。

ではナショナリズムに媒介された資本主義体制の教育はどのような害悪を生じているのであろうか。ラッセルは、これを『教育と社会統制』(Education and the Social Order)のなかで明確に指摘している。まず彼が取り上げるのは、「教育における階級意識」(Class-feeling in education)<sup>(22)</sup>である。すなわち、資本主義社会という階級社会にあっては、父親の社会的地位が子供の社会的地位を決定し、子供はその長所のゆえに尊敬されるのではなくて、父親の地位のゆえに尊敬されるという事態を生ずるといっているのである。こうした雰囲気の中なかでは、子供の独創性や自尊心はすっかり影をひそめてしまう。しかもこの階級社会の価値基準が教育課程にも及ぼすにいたる。すなわち、カリキュラムについても、富に対する尊敬が効力をもつのである。このような階級差による教育的欠陥は、子供に対して自由や知性を萎縮させる心理的、精神的な悪弊を与えることになる。つまり子供の心のなかに恐怖がしのびこみ、現状を打破しようとする傾向から戻込みして、社会の中なかのより幸福な人たちをすべての進歩に対する反対者と考える。さらに社会の中なかの薄幸な人たちは、自分たちをその犠牲に供されているという不正を感じとることのできない「知的萎縮性」(intellectual atrophy)<sup>(23)</sup>にかかり、偏見で世界を見渡すようになるのである。

ラッセルが、つぎに指摘する重要な欠陥は、「教育における競争」(Competition in education)<sup>(24)</sup>である。資本主義体制は当然生存競争を前提としている。競争意識の過剰な教育は、必然的に子供から精神の安定を奪い、学習の真の喜びを奪いとるものである。教育において競争に信頼をおく過剰教育は、青年の想像力や知性やまた健康さえも危険にさらし、とくに聡明な素質の持ち主ほどひどい害をうけるのである。過剰教育をうけた比較的聡明な人たちは、競争という最高手段を信仰するあまり、かえって自発性や自信を喪失して、かれらが本来なり得たはずのものよりはるかにつまらない社会人となってゆくのである。競争のあるところ試験はつきものであり、競争と試験とを要素として動いてゆくかぎりこの問題は解決されることはない。かくてラッセルはいう、「競争は、教育上悪いばかりでなく、青年たちの前に示さるべき理想としても悪である。いま世界の必要としているものは競争ではなくして、組織と協力とである。(What the world now needs is not competition but organization and co-operation) 競争の効用を信ずるすべての信念はいまや時代錯誤である」<sup>(25)</sup>と。

ラッセルは、かくのごとく経済的だけでなく、倫理的にも青年を競争的であるように教育することは望ましくないと考えたのである。ではかかる資本主義社会における教育の害悪はどうしたら克服することができるのであろうか。ラッセルは結論していう。「現存教育制度の欠点は、経済組織を改変しなければ救済することはできないであろう」<sup>(26)</sup>と。そして資本主義が廃止された暁こそ、「現代教育におけるナショナリズムの果している危険な役割は、たとえ完全に消滅しなくとも、相当程度減少するであろう」<sup>(27)</sup>と。さらにこの点について考察してみよう。

#### (4)

ではラッセルは、社会主義体制の教育において、資本主義体制の教育の害毒がどのように克服されていると考えていたのであろうか。それに先立って、ラッセルは、 Kommunismus に対してどう対処していたのであろうか。彼はすでにナチスがドイツを征覇し、 Kommunismus がソヴィエトを掌握して以来、このナチズムと Kommunismus とを人間の全行動を指導する信念の体系、いわゆるイデオロギーとして把えてきた。彼はいつている、「ドイツとソヴィエトに、科学に基づく新しい布教手段

をもった新しい宗教(new religions)が抬頭するにいたった」<sup>(28)</sup>と。そもそもコミュニズムは、その理論的原則をマルクス(Marx)に仰いでおり、人間の意思とは無関係に、人類の歴史を支配する弁証法的唯物論という理論が存在し、階級斗争によって社会改造を遂行しようとする革命的実践をともなうものである。しかしラッセルは、マルクスズムが人間の思想的自由よりも国家権力によって擁護されている独善的な教条主義に反対する。すなわち、社会の問題をすべて階級斗争にむすびつけて解決せんとする思考方法に賛成できなかったのである。ラッセルは、「コミュニズムは、貧困、憎悪および斗争によって育てられたイデオロギーである」<sup>(29)</sup>といい、階級斗争にすべてを帰する単純化は、教育の世界にあっては進歩はあり得ないであろうとするのである。

ラッセルは、コミュニズムに対して、このような基本的態度をとっているが、資本主義社会における教育と比較して、共産主義下の教育が現在すでに勝っている面をいくつかあげている。まずその一つは、「競争を緩和すること(the mitigation of competition)、そして個人的な学習法をグループ活動でもって置換えること(the substitution of group activities for individual work)である」<sup>(30)</sup>と評価する。アメリカやイギリスでも、進歩的な学校はこういう計画を実施しているが、試験や大人になってからの生存競争の準備までもしてやらねばならない不利がある。しかしソヴィエトの子供は全くこうしたことは体験しなくてもよい。それは競争が学校だけでなく、日常生活からも消し去られているからである。このことが教育上重要な協力精神を作ることをして可能にしているのである。とにかく、子供たちに、「競争という反社会的な観念をほとんど完全に除去し得た教育」(Eubication from which the anti-social ideas of competition has been almost entirely eliminated)<sup>(31)</sup>を確立したのはすばらしい功績なのである。

つぎにラッセルは、子供たちが、はじめから社会の一員であり、社会的義務に対する自覚をもつように教育されているという美点を指摘する。若い人たちが社会の一員であることを自覚することはよいことであり、自分の能力の許す限り社会にとって有用なものでなければならないという感覚を備えることもよいことである。西欧の進歩的教育は、子供たちに、自惚れを一般化し、大人たちの方がかれらに奉仕しなければならない「小さい貴族」(a little aristocrat)であると感ずるようになってしまう傾向があった。しかしながら、ソヴィエトの子供たちは、地域社会に対して義務を負っていると感じるように教育されており、しかも教訓によってではなく、自分の活動を実際に処理してこれを感じせしめられるのである。じつにソヴィエトにおける道徳教育の行動主義的部分は、非常に尊敬に値するものであって、西欧における青年のような懷疑にふけて絶望したり、掠奪をこととしたりするようなことはしないのである。ラッセルは、その教育の長所を総括して、「若い人びとが、このコミュニズムをもって、より立派な世界を造り上げる手段であると信じ、知性を喪失することなく、絶対的にその主義主張を受入れることができるということは、教育の成功である」<sup>(32)</sup>と結論している。

ラッセルは、かくのごとくコミュニズムの教育の成功をみとめたのであったが、マルクスズムそのものについては、その公式的教条主義に反対し、その狂熱的な独善主義にもとずく共産主義は迫害を正当化するために使用されている一種の宗教とみなし、このまま継続するならば、知的進歩にとっていつかは障害となるであろうと警告している。彼の全体的見地からするコミュニズムへの反対は、さらにナチズムを含めてのファシズムに対して根本的となる。ファシズムは、ラッセルにとっては、合理性も科学性も否定する現代の新しい宗教(new religion)なのであり、もっとも排撃するものである。彼は、ファシズムが真理を決定する方法として採用するものが戦争と競争であるとして、つぎのようにいう、「わたしのファシズムへの反対は、コミュニズムへの反対よりも根本

的なものである。それは、 Kommunismusの目的は大体賛成できるが手段には賛成できない点がある。しかるにファシズムは、目的も手段もともに反対である」<sup>(33)</sup>と。ファシズムは根本的に民主的ならざるものであり、その全体主義思想は、いわば「理性への反逆」(the revolt against reason) である。

かかるファシズム下における全体主義的イデオロギーの教育はどのような状態で行われたのであろうか。ファシズムは帝国主義的ナショナリズムを武器とし、愛国的宣伝を道具として、侵略戦争に投入することを企てる。ラッセルは、かかる愛国心を「大規模な殺人行為の準備」(preparation for large-scale homicide)<sup>(34)</sup> であるといっている。このような教育は青年たちにその最大の義務が殺人であるということ教えるものである。かかるナショナリズムの完成した国民教育では、子供の知性も人格も全く認められることなく、逆に将来大量の殺人を行うべき新兵として取扱われるにいたる(the pupil is not considered for his own sake, but as a recruit)<sup>(35)</sup>のである。現代はラッセルのいう政治的ナショナリズムや「資本主義の掠奪的形態」(the forms of capitalism)<sup>(36)</sup>ともいふべき愛国心に任せて、人間本来の栄光たる理性への信仰を放棄してしまった。そして戦争を不可避にするような熱狂的感情を教育を通して移植している。政治権力が子供たちの心のなかに狂気と殺人の準備と経済的不正と残忍さを作り出そうとしているこの事態にあって、教育がかかる時代の病弊を促進させるように行われてよいものであろうか。ラッセルはここで、現代を根本的に解決するものなかに、人間を正気にする教育を考えるのである。

## (5)

現代のごとき狂気の世界にあって、人間を正気にする教育はいかなるものであろうか。ラッセルは、現代教育のあるべき姿を探究して、これを「人間を正気にする教育」(Education which makes men sane)<sup>(37)</sup> といひ、ここに彼の教育思想の課題を披歴するのである。ここでラッセルは、現代自由主義教育を主張する。彼のいう自由は、18—19世紀的な自由ではない。すなわち、個人や集団に対する外的な統制の欠如というだけではなくて、個性を積極的に表現することのできる自由のことである。そしてその自由には知性を確立することが必要である。それは政治や伝統や宗教などの精神的患者とならないためであり、それらの虚偽を看破しなければならないからである。権力の横暴やイデオロギーの狂信がおとろえない限り、知性は磨かれなければならない。知性こそ、「独力で知識を獲得し、かつ健全な判断を形成する精神的習慣」(mental habits which will enable people to acquire knowledge and form sound judgements for themselves)<sup>(38)</sup> を創造するものである。ここに真実と虚偽を正しく認識し、横暴と不正を批判できる知性を養成することの重要性がある。

さてラッセルは、自由主義教育における人間形成の方法として、「心理的建設性」(psychological constructiveness)<sup>(39)</sup> を主張する。ここでわれわれは、人間が興味をもっている体系の潜在的エネルギーを増大させるとき、これを建設的 (constructive) といひ、縮小させるとき、これを破壊的 (destructive) といひるのである。そして人間はだれでも建設への衝動と、破壊への衝動とをもつものである。子供のうちから、破壊活動の満足よりも、建設活動の喜びを経験させることによって、道徳的性質を形成することができるのである。このことは、換言すれば、教育が、政治権力によって、狂気的信念や精神的習慣を、子供たちに注入しようとするところから擁護し、さらに積極的に、服従や訓練の代りに、子供の権利と自由を尊重し、創意と衝動とを奨励する方向に働くということである。つまり、自由探究の高尚かつ深遠な精神を創造することである。

そしてラッセルは、この心理的建設性を土台として、既存の社会的勢力を利用したり、新しい社会的努力を創造したりするなお一層の建設的な方法を指導すべしとして、これを「社会的建設性」(social constructiveness)<sup>(40)</sup>といい、これを刺激する教育方法を主張する。現代は建設的な努力がほとんど全くその影をひそめ、破壊的な勢力が政治、社会、文化のあらゆる面にはびこっているところの「恐怖が全世界を蔽っている時代」<sup>(41)</sup>であり、「今日の世界は狂った世界である」<sup>(42)</sup>といえる。いつ起るかも知れない核戦争の脅威の前に、人類は救いのない気持で生きている。そしてこの不安の状態が人間疎外的傾向を強化し、人間の正気を圧倒しつくしている。このときラッセルのいう社会的建設性をもった教育とはなんであろうか。

まずそれは戦争防止のための教育である。ラッセルは、戦争というものじつに馬鹿げたことであり、同時に罪悪であるということを、国民に周知徹底させなければならないと力説する。そのためには、国家の栄光が、外国の財貨を掠奪したり、大量殺戮したりすることではなく、また愛国心が恐怖を世界中にばらまくことでもなく、むしろ世界諸国の尊敬を集めることであるということを理解し、進んで教育を通して平和を建設することにあるということ把握させなければならない。ラッセルは、現代世界の危機の根源が、じつは人間の心のなかにあることをすでに看破し、「平和に対する最大の敵は人間の心にある」(It is in the hearts of men that the evil lies)<sup>(43)</sup>といている。この点に関しては、フロム (E. Fromm) が平和を確保するのは、「心理的武装解除」(psychological disarmament)<sup>(44)</sup>であるといっているのと相通ずるものである。すなわち、平和への希望が効果的に印せられるためには、従来の心理的障害をなんらかの形において改善し、人間相互のあいだに介在する猜疑や恐怖や権力愛などを制限して、これらの憎悪の念に代えて、寛容や協同や謙遜などの精神を育成しなければならないのである。

われわれは、過去の歴史の罪深い遺産に因るところの憎悪の念を、新しい知恵で置き直さなければならない。そしてこの新しい知恵を体得した人間のみが、新しい将来世界を作り得るのである。ラッセルは、この世界を、「飢えた人間のいない世界、親切な感情がゆきわたり、不安から解放された精神が、眼と耳と心を楽しませるものを創造する世界」<sup>(45)</sup>であり、また「輝ける美と卓越した栄光の世界」(a world of shining beauty and transcendent glory)<sup>(46)</sup>であるといっている。この考えがさらに発展して、彼の世界政府樹立の理論が展開されるのである。教育とは、歴史的現実の精密な把握の上に、新しい歴史を創造する仕事である。おもうに、ラッセルの教育思想は、熾烈なる現代的関心に基いて、人間の自由と人類の平和のために、現代教育の当面する課題に込えているのであって、まさに「教育は新世界を拓く鍵である」(Education is the key to the new world)<sup>(47)</sup>ということが出来る。ラッセルの教育思想は、平和と教育、自由と教育、人間と教育において、さらに追究されなければならないのであるが、本稿においては、ただ政治権力と教育に焦点をおいて問題点を指摘したものである。

- 註 (1) P. A. Schilpp, The Philosophy of Bertrand Russell,  
E. C. Lindeman : Russell's Concise Social Philosophy, p. 576
- (2) B. Russell, Principles of Social Reconstruction, p. 75
- (3) W. H. Kilpatrick, Philosophy of Education, p. 148
- (4) B. Russell, On Education, Introduction, p. 9
- (5) // Sceptical Essays, p. 189
- (6) // Education and the Social Order, p. 190
- (7) // idid., p. 198



金子 B. ラッセル教育思想研究

- (8) // Principles of Social Reconstruction, p. 100  
 (9) // ibid., p. 101  
 (10) // ibid., p. 101  
 (11) // On Education, p. 225  
 (12) // Education and the Social Order, p. 161  
 (13) H. J. Laski, The State-In Theory and Practice-p. 135, 137, 139, 161  
 Liberty in the Modern State, p. 52  
 (14) B. Russell, Power-A New Social Analysis, pp. 84-107  
 (15) // The Prospects of Industrial Civilization, p. 31  
 (16) // Fact and Fiction, p. 116  
 (17) // ibid., p. 117  
 (18) // The Prospects of Industrial Civilization, p. 27  
 (19) // Fact and Fiction, p. 121  
 (20) // Education and the Social Order, p. 144  
 (21) // On Education, p. 247  
 (22) // Education and the Social Order, pp. 145-159  
 (23) // ibid., p. 158  
 (24) // ibid., pp. 160-177  
 (25) // ibid., p. 177  
 (26) // In Praise of Idleness and Other Essays, p. 139  
 (27) // Education and the Social Order, p. 206  
 (28) // Religion and Science, p. 7  
 (29) // Portraits from Memory and Other Essays, P. 214  
 (30) // Education and the Social Order, p. 191  
 (31) // ibid., p. 194  
 (32) // ibid., p. 188  
 (33) // In Praise of Idleness and Other Essays, p. 113  
 (34) // Power-A New Social Analysis-, p. 220  
 (35) // Education and the Social Order, p. 233  
 (36) // ibid., p. 205  
 (37) // ibid., p. 247  
 (38) // Sceptical Essays, p. 159  
 (39) // On Education, pp. 115-116  
 (40) // ibid., p. 114  
 (41) // New Hopes for a Changing World, p. 116, p. 211  
 (42) // Education and the Social Order, p. 246  
 (43) // Has Man a Future ?, p. 50  
 (44) E. Fromm, May Man prevail ?, p. 16  
 (45) B. Russell, Human Society in Ethics and Politics, p. 238  
 (46) // Has Man a Future ? p. 16  
 (47) // On Education, P. 66